

松本市教育研修センターだより

No.16 令和5年7月31日

松本市 全教職員研修「まつもと学びの日」

7月26日（水） 松本市の初めての試みとして、全教職員研修「まつもと学びの日」を開催しました。この研修は、松本市の小中学校で子どもの育ちに関わる全ての教職員が一つの学びの場に集い、松本市がめざす子どもの育ち、それを育む大人のかかわり、そしてそれが営まれる学校のあり様について、講話・講演、そして、参加者同志の対話を通して、考えを深め、願いを共有し、実践を進める見通しと意欲を高めることを目的としています。

主会場となった教育文化センターには各学校から約70名の先生方が参集参加しました。そして各学校に設けられたオンライン会場には、各校の全ての教職員が参加されました。

冒頭、大久保教育研修センター長が「松本の全ての大人が『子どもが主人公』の学びの実現に向かって1歩踏み出す、大きな刻みになってほしい」と本研修に寄せる願いを述べ、研修がスタートしました。

伊佐治教育長の講話

始めに行われた「教育長講話」では、伊佐治裕子教育長が、脈々と受け継がれる「学都松本」の伝統の上に立つ「子どもの権利を尊重した松本の教育への願い」を、松本市の全ての教職員に向けて熱く語りかけました。

《講話の骨子》

○松本が「学都」と呼ばれる所以は…

子どもの教育が大切に考えられていた

一人一人の子どもの人権が大切にされていた

○現在も…他自治体に先駆け「子どもの権利に関する条例」を制定

○松本が目指す学び

非認知能力の育成 あそび・体験の充実 → 子どもの「幸せ」の実現を

○「松本の強み＝共助のコミュニティ」を活かして



上智大学 奈須正裕先生による基調講演

基調講演は、中教審の委員を務め、現行の学習指導要領の策定にも大きく関わられた上智大学の奈須正裕先生を講師に迎え、行われました。「『子どもが主人公』の教育哲学」をテーマとした講演の中で奈須先生は、「子どもの幸せの実現のために、資質・能力の確実な育成をめざしましょう。そのために私たちの『子ども観』（子どもは有能な学び手）や『学力観』（自ら考え、効果的に状況に働きかける力）を更新し、授業づくりの基礎基本を徹底しましょう！」と、具体的な子どもの姿を示しながら、子どもが自ら考え学ぶ授業づくりをする上で、大切にしたい考え方について、わかりやすくかつ、力強くお話をいただきました。



リフレクション

講演後、主会場に参集された先生方は4～5人のグループに分かれ、講話・講演の感想やそれぞれの1学期の実践の手応えなどについて考え・思いを交換し合う時間を持ちました。

多くは当日初めて顔を合わせる先生方のグループでしたが、大変熱心で親密な話し合いをいただきました。40分の時間では到底足りないと思えるほど充実した時間となりました。



学校会場での学び

各小中学校の会場でも、それぞれの学校の独自の企画により、リフレクションの時間を持ちました。多くの学校から、「大変充実した対話の時間となった」「有意義な会であった」という報告をいただいています。その中の1校、X中学校では、

- ・X中のよさは何だと思いますか？ ・あなたが目指している理想のX中はどのような学校ですか
- ・理想のX中に近づくため、2学期以降実践していきたいことは何ですか

という項目のワークシートを持ち寄り、リフレクションの時間を持ちました。大変盛り上がった対話の実施後、先生方からは次のような感想が寄せられました。

○考えていること、思っていることを言葉にして伝え合うことのよさや大切さを改めて感じる事ができた。目の前の生徒たちを我々が第一に考え、理想実現のために、また日々を先生方と頑張っていきたいと思う。

○同僚と話すと悩みを共有できて大切な時間だった。学校をよくしていくために何か頑張ろうと思った。

「対話」を通してお互いの思いをわかり合い、ともに学校を創るチームの意識を深める、そんな大切な機会になったことが、先生方の振り返りからうかがわれます。

研修の振り返り

【参加者から】

主会場の参加者や各学校から、多くの感想をお寄せいただきました。ありがとうございました。一部をご紹介します。共有したいと思います。

★貴重な講演を聞くことができ、自分自身の教師としてのあり方を見つめ直す大切な機会になった。生徒を信じることや生徒の可能性を私たち教員は常に大切にしなければいけないと思った。生徒ばかりに「変化・成長」を求めるのではなく、私たち教員こそ今の時代、これからの時代を見通した「変化・成長」をするべきだと改めて思った。変化を恐れず、生徒と共に成長していきたいと思う。

★自分が今まで授業をしていて感じていたモヤモヤを、言葉にさせていただいたような気がする。個別最適な学びの実現に向けて、個人としても学校としても自治体としても取り組んでいくべき課題、意識改革が必要だと感じた。教科、単元、内容をじっくりと見つめなおし、取り組めるところから少しずつ授業のあり方を変えていこうと思う。

★「子どもから材にアクセスすると主体的になる」の言葉から、信州教育で不易な体験に関わる部分の重要性を感じた。今までの正解主義から抜け出し自立した学び手を育てるために、もっと自由に大胆に、子どもを主人公にする営みが学校・教室で挑戦されることの大切な時代であると、背中を押される思いだった。

★今までの指導は、自分がそういう教育を受けていたということもあって、時代に合っていないものだったなと思った。教師とはこうあるべきという固定観念を捨てて、子どものことを信じて、子どもが主人公になれる場を整えていくことがこれからの教師の役目なのだったと思った。…教科書をどう活動に取り入れ、どうやって内容を身につけさせるのか、この夏休みに研究したいと思う。

【各学校会場の振り返りシートから】

◆上智大学の奈須先生のご講演は、大変好評だった。今後の先生方の授業づくりに対する意識が少し変わったように感じた。大きな変革が難しくとも、「算数のこの単元では取り組んでみよう」と小さなところから先生方が取り組めるよう、提案していきたい。

◆校内で行ったリフレクション・タイムは、1学期の取り組みを中心に、小グループで語り合ってもらい、どのグループも和気あいあいとした様子が見受けられ、有意義な時間となった。

◆全職員で色々な方向から一学期を振り返り、子どもの姿や自分の実践について語り合うことができた。また、2学期の思い描きを行い、自分の目標、やってみたいこと・実践を話すことを通して、この夏休みにやっておくべきことも明確になりいいスタートがきれると感じた。先生方とこのように落ち着いて話をする機会がとれたことがとてもよかったと思う。

◆教育長講話では、基本的な松本市の教育に関する考え方を聴くことができ、松本市に勤務する全ての教職員で共通認識をすることができたことは貴重な機会であった。

◆教育長の「学校という閉じられた空間での学びだけでは、子どもたちにこれからの次代を生きる力を身につけられない」という言葉強く心に残った。…奈須先生のお話のどれもが「社会とつながる教育課程」の核心に触れることばかりであった。これまでの学校教育を大きく転換する「学力論の変化」について奈須先生のお話をもとに、自校の取組を見直したい。